

### 3. 3年保育4歳児事例

広瀬 麻希子

#### Ⅲ期

新しい教師や友達、身近な環境への興味や関心を高めながら自分の遊びを広げていく時期

#### 1. キーワード

感動体験 自然物とのかかわり

#### 2. この事例を選んだ理由 (ナエは2年保育児である)

A児は一人でロープ遊びや製作をして過ごすことが多い。教師の近くを自分の居場所とし、教師のそばから友達の遊ぶ姿をよく見ている。遊びに誘うと、加わることもあるが見ているだけのこともある。本事例は、遊びのきっかけをつかめないうえにA児を教師が砂場に誘ったところ、その場にいた友達と同じ感動体験を味わうことによって一つの遊びに没頭する姿が見られた事例である。

#### 3. 事例

事例1 「もう一回やってみよう」

6月17日(水)

A児、B児、教師が砂場へ行くと、Z児とW児が砂を手で掘ったり、といに水を流したりして海をつくり遊んでいた。それを見たA児は「わたしも海をつくりたい」と言い、Z児とW児がつくっている海の近くを手で掘り始めた。B児と教師も一緒に掘りだした。

暫くしてZ児、W児がつくった海とA児、B児、教師がつくった海が偶然繋がるとB児は水をくみに走って行き、タンクに水を入れて戻ってきた。A児と教師が筒状のといを斜めにして持ち、B児が上から水を入れるが、下から水が出てこない。

全員 「あれ？」

A児と教師が筒状のといを上を持ち上げると、水が勢いよく流れ出た。

全員 「わ~~~~！」「びっくりしたー」

といの近くで水が流れ出るのをしゃがんで待っていたZ児やW児の手足に水しぶきがかかった。

Z児 「ホントの海になった！」

A児 「もう一回やってみよう」

B児はまた水をくみにいった。A児はといの下の方を砂で埋め始めた。B児が帰ってきてといの上から水を流そうとする。

A児 「B児ちゃん、待って。ここまだできてないから手伝って。ここ(といの下)に砂を集めて！」

B児 「うん」

教師 「A児ちゃん、B児ちゃん、なんでそこに砂を集めてるの？」

A児 「そうしないと水がすぐに出てきちゃうから」

教師 「そうなんだ。なるほど。だからそこにいっぱい砂を集めているんだね」

しばらくするとA児は「これで大丈夫」と言い、B児が水を流し始める。Z児、W児がその様子を見守る。

全員 「あれー、あれー、あれー」

タンクの水を全部入れ終わっても水が下から出てこない。A児と教師がといを上を持ち上げると、水が勢いよく流れ出た。

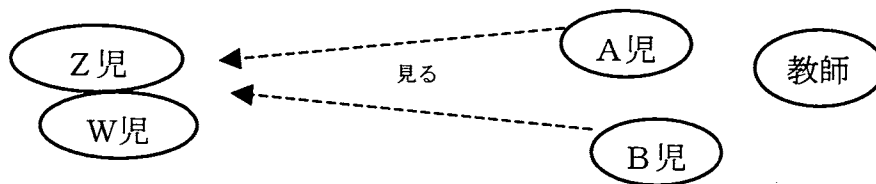
全員 「わーーーー」

その後、といの下を砂で埋めて、といに水を流し入れ、といを持ち上げて勢いよく水を流し出すという遊びを何度も繰り返し楽しむ姿が見られた。

### <教師や友達とのかかわり>

砂を掘って海をつくる

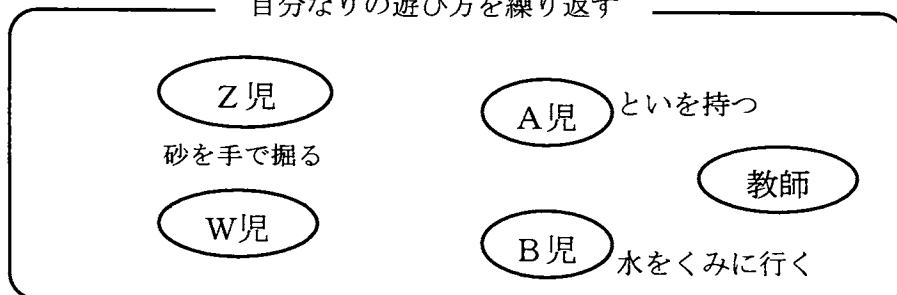
真似をして砂を掘る



感動体験の共有  
「わーーーー」



自分なりの遊び方を繰り返す



## 4. 考 察

### (1) この事例からわかる幼児の学び

#### ① 感動体験の共有

幼児らは最初にといで水を流し入れたとき、水が流れ出てこないことを「あれ？」と不思議に感じている。その直後、水の勢いと水しぶきに全員が「わー」と声をあげて驚いている。このように不思議さや驚きの感情体験を共有することで、4人の中にはまた同じ現象を楽しみたいという共通の願いが生まれたと考えられる。

#### ② 自分なりに遊びにかかわる方法

4人は場を共有し、同じ感動体験を味わった後、A児はといの下の方を砂で埋め、B児は水をくみに行き、Z児とW児は砂を手で掘りながら体に水しぶきがかかることを期待して待つというように、自分なりのかかわり方で遊びに加わっている。自分なりの遊び方で何度も繰り返して楽しむ体験が、今後自分らしさを発揮しながら友達とかかわる姿につながると思う。

### (2) 環境の構成や教師の援助

#### ① 自然物

幼児らは砂場で砂や水の感触を楽しみながら、穴を掘ったり水を溜めたりすることを楽しんでた。その際、予想していなかった現象が起こった。このように園庭の砂や水などの自然物があることで、幼児らはみんなで同じ現象を楽しむことができた。

#### ② 楽しさに共感する教師

W児とZ児、A児とB児と教師がつくった海が偶然つながったことから、5人は砂場にできた一つの広い海を共有することになった。教師は広い海ができたことを喜ぶ幼児の思いに共感し、その後も一緒に遊びを続けることにした。そして、幼児らが予想していなかった現象に教師も一緒に驚くことで、遊びに加わることをためらうことの多いA児も安心して自分なりの遊び方を見つけて遊び続けることができたと考える。

### (3) 今後に向けて

楽しさや驚きなどの感情を共有する体験は、今後、さらに遊びを広めていくために大切であると考えられる。教師も遊びの仲間として加わり、幼児らの思いに共感し、幼児一人一人が遊びの中で自分らしさを出しながら他児とかかわり合うことができるように援助していきたい。

### Ⅲ期

新しい教師や友達、身近な環境への興味や関心を高めながら自分の遊びを広げていく時期

#### 1. キーワード

応答的關係 遊びの広がり

#### 2. この事例を選んだ理由 (ナエは2年保育児である)

2学期に入り、D児、C児を中心としたバーベキューごっこが続いた。肉や魚などをつくることから始まり、店の構えや客が座る場所の構成など、自分たちなりに工夫して遊びをすすめる様子が伺えた。本事例では、客と店員とのやりとりの中で使われるお金というアイテムが増え、幼児ら同士が互いの思いを受け入れながら楽しくかかわり合う姿が見られた。

#### 3. 事例

事例2 「おー、いいねえ、どうやってつくる？」

9月28日(月)

D児、C児、E児、F児がテラスの前でバーベキューのお店を開いて過ごしていた。4人は頭と腰にバンダナを巻き、店員となり食べ物を台の上で焼いていた。教師は誘われて客となり、食べ物を焼いている台の前の椅子に座った。

教師 「おいしそうですね、おすすめはどれですか？」

C児 「えーっとね、この大きい魚です」

D児 「この目玉焼きも、今つくったばかりだから美味しいよ」

教師 「そしたら大きい魚と目玉焼き一つください」

C児 「はいはい、どうぞ、じゃんじゃん食べてくださいよ」

C児はトングで魚と目玉焼きをつまみ、皿に載せて教師に差し出した

教師 「いただきまーす わあ すごく美味しいです」

しばらくするとI児、J児らも客としてバーベキューを食べに来た。D児、C児らは嬉しそうに客に食べ物を出している。

教師 「ごちそうさまでした。」

C児 「はい、お金は△☆□円です」

教師 「わかりました はい どうぞ」

教師はお金をポケットから出す真似をし、C児の手にタッチをした。

C児 「はい、ありがとうございます」

D児 「ねえ、お金つくったらいいんじゃない？」

C児 「おー、いいねえ、どうやってつくる？」

D児 「紙、このくらいに切ればいいじゃん」

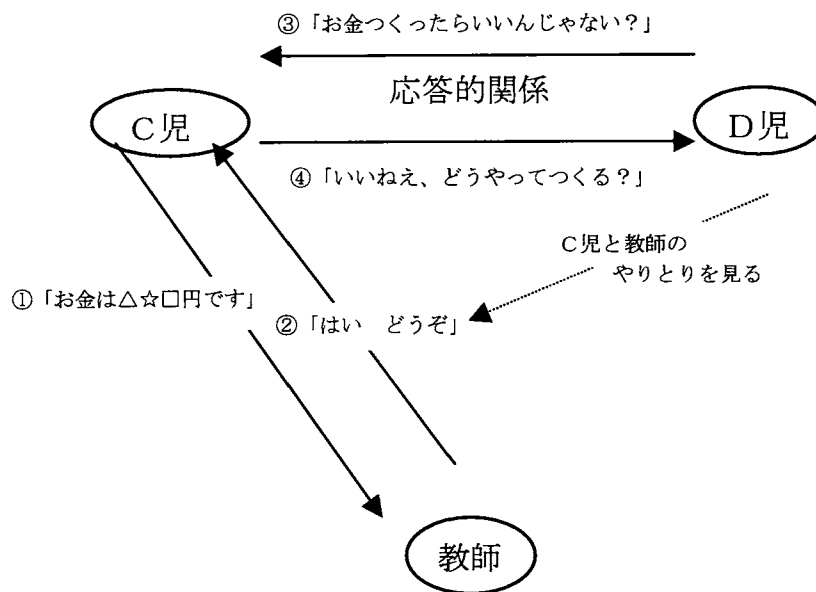
C児 「そっか じゃあつくとするか」

D児は製作コーナーの色画用紙を小さく切り、マジックで数字を書いた。それを見たC児、E児、F児は真似をしてつくり出した。

つくったお金が増えるとD児らは、教師やI児、J児らに「このお金を持って食べに来て」と言い、自分たちの店に戻った。

その後、バーベキュー屋では、バーベキューを食べた客がお金を払い、店の中のC児、D児、E児、F児がおつりを渡すというやりとりが続いた。

## <教師や友達とのかかわり>



## 4. 考 察

### (1) この事例からわかる幼児の学び

#### ① 安定した関係の中で遊ぶこと

C児はこれまで、教師や年長組の兄と一緒に過ごすことが多く、友達の中でゆっくり夢中になって遊ぶことが少なかった。バーベキュー屋さんごっこの遊びの中では、始めは教師と一緒に遊ぶことを楽しんでいたが、次第に同じ場を共有して遊んでいるD児と、言葉のやりとりをしながら遊ぶ姿が見られるようになってきた。このことから、バーベキュー屋さんごっこの遊びの中でD児とC児は、思いを伝え合える友達と安心して遊ぶ経験を積んでいると考えられる。

#### ② 応答的關係

「お金つくったらいいんじゃない?」「おー、いいねえ、どうやってつくる?」…という言葉のやりとりから、D児とC児が相手の思いを受け入れながら自分たちの遊びを広めていく様子が伺える。3歳児の頃のお店屋さんごっこの経験や、日常生活において誰もが経験している買い物のやりとりはイメージを共有しやすい遊びであると思われる。

## (2) 環境の構成や教師の援助

### ① 少しずつ増えていく遊びのアイテム

バーベキューをするために必要な食べ物、店員が身につけるバンダナ、店の前のカーテンなど、毎日徐々に変化し、増えていくアイテムを残しておき、前日同様の環境設定をしておいた。そうすることで、幼児らは自分たちのイメージを少しずつ積み上げていくことができたと思う。

### ② アイディアを生むきっかけを与える教師

教師は今まで何度も客になっているが、お金を求められたことはなかった。この日初めてC児が「お金は…」と口にした。そこで教師はお金を払う仕草でC児の思いに応えた。C児はそれだけで満足している様子であったが、D児にとっては、教師の仕草がお金を自分でつくるというアイディアを生むきっかけとなった。このように、教師は遊びの方向性を変える役割を担う存在であると考えられる。

## (3) 今後に向けて

友達に思いを伝えたり友達の思いを受け入れたりしながら遊びを広めていくことは、幼児ら同士がかかわりを深めていく中で大切である。応答的な関係を生み出す環境の構成や援助について、今後も考えていきたい。

## IV期

身近な環境への興味や関心が高まり、自分で遊びを深めていく時期

### 1. キーワード

仲間と一緒に遊ぶ楽しさ      遊びに応じた素材の選択

### 2. この事例を選んだ理由      (マエは2年保育児である)

11月の下旬から、C児、K児らが園庭の落ち葉を集め、体にかけてあたり体を埋めたりして繰り返し遊ぶようになった。教師も一緒に落ち葉の感触を楽しみ、場づくりに参加していた。教師と一緒に遊ぶことを楽しんでいた幼児らが、一緒に遊ぶ友達が増えたことによって、自分たちだけで遊びをすすめていくようになった事例である。

### 3. 事 例

事例3 「先生はもうやなくていいの」

12月2日(水)

C児、K児が落ち葉を集めて段ボールで囲い、お風呂をつくって過ごしていた。しばらくするとK児の「レンガのお風呂をつくろう」というアイデアにC児が賛成し、二人は大型積み木をテラスから園庭に運んで組み合わせていた。教師がその様子を近くで見ていると、C児が声をかけてきた。

C児 「先生も積み木持ってきて。いっぱい運ばないといけないからね」

K児 「そうや、全部ねんよ」

教師 「全部使うの？それは大変だね。じゃあ先生も手伝うわ」

教師はC児とK児が「ここに置いて」という場所に積み木を置くことを手伝った。そして、3人で大型積み木をすべて運び終わると、大型積み木をレンガに見立てたお風呂ができた。

教師 「わあ、かっこいいお風呂になったね」

K児 「あと、葉っぱ入れたらできあがりやよ」

C児 「よーし、(隣に集めてある葉っぱを指差しながら) こっちの葉っぱをお風呂の中に入れるとするか」

3人は、集めてあった落ち葉を、大型積み木で囲んだお風呂の中に入れ始めた。そこへZ児とX児が様子を伺いに来た。

X児 「何してる？」

C児 「お風呂に葉っぱ入れてるの」

Z児 「いーれーて」

C児 「いーいーよ。じゃあここに葉っぱをいっぱい入れて」

Z児、X児も加わり、C児、K児の4人で葉っぱをお風呂の中に入れ始めた。教師もそれを手伝おうと思い、幼児らと同じように葉っぱを運ぶことにした。

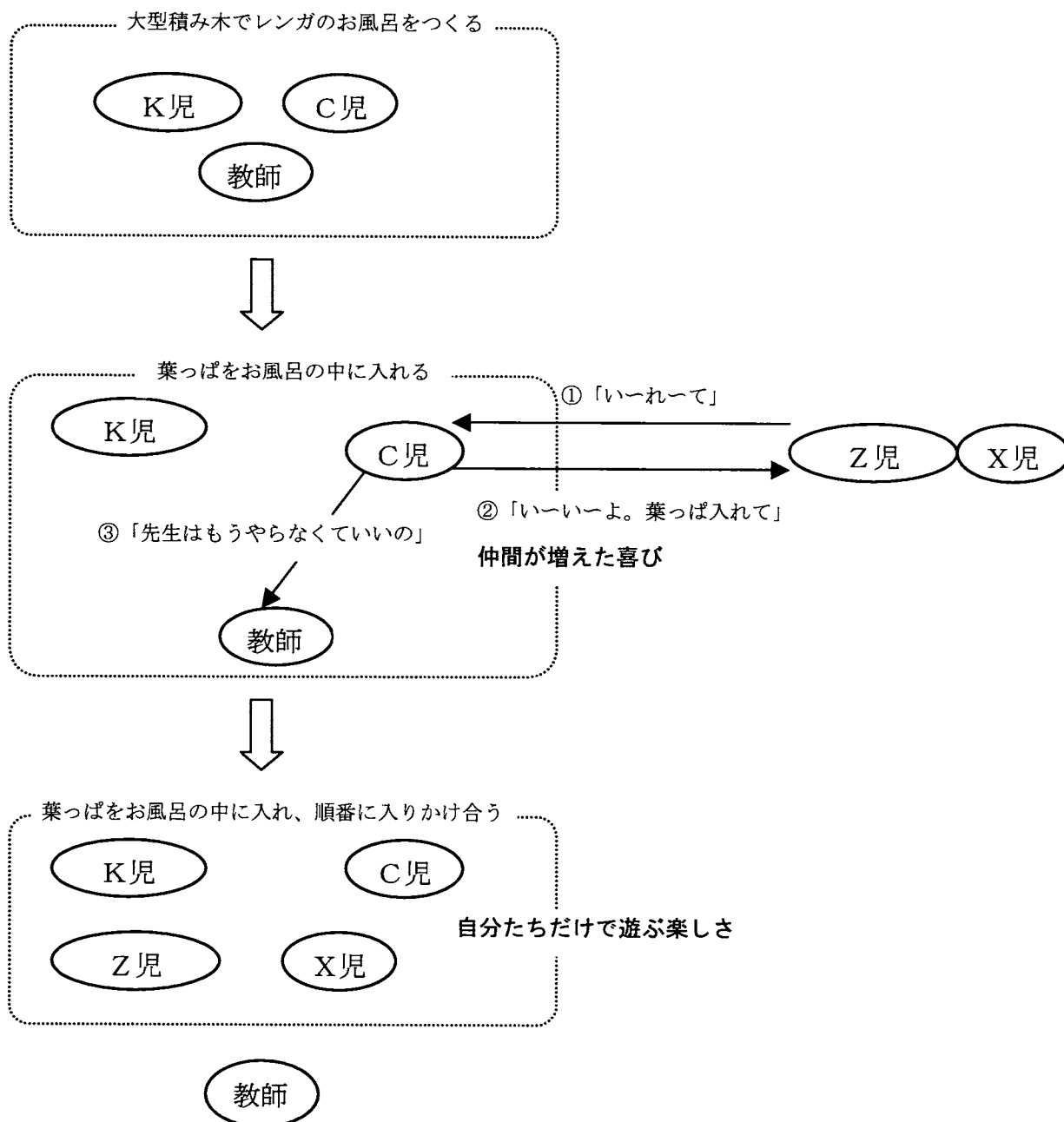
C児 「先生はもうやらなくていいの。Z児さんとX児さんがやってくれるから」

教師 「そうなの？じゃあ、完成したら教えてね。入りに来るからね」

C児 「はいはい」

しばらくして様子を見に行くと、4人は落ち葉がたっぷり入ったお風呂に順番に入り、落ち葉をかけあうことを楽しむ姿が見られた。

### <友達や教師とのかかわり>





## 4. 考 察

### (1) この事例からわかる幼児の学び

#### ① 遊びに応じた素材の選び方

落ち葉を集めての遊びが始まった頃から、周りを段ボールで囲み、お風呂に見立て、中に入り落ち葉の感触を楽しむ姿が見られた。そして何日も同じ遊びが続いたが、この日初めてK児が大型積み木を使ってお風呂をつくることを考えた。これまで段ボールを使って充分遊んだことで、段ボールでは形がすぐに崩れてしまうことに気づいたと考えられる。そこで、大きくて形のしっかりしている大型積み木を使うことに目が向いたのであろう。

#### ② 仲間と一緒に遊ぶ楽しさ

C児の「先生はもうやなくていいの」という言葉からは、Z児、X児が自分たちの遊びに入り、仲間が増えた喜びを感じていることがわかる。このように、喜んで新しい仲間を受け入れることは、同じ場に集う幼児同士が仲間意識を強めながら遊びをすすめていく姿につながっていくと考えられる。

#### ③ 3年保育児同士のかかわり

C児、K児、X児、Z児は3年保育児である。3歳児の頃から、さまざまな遊びや活動を一緒にしてきたであろう。その積み重ねにより、遊びに入りたいという思いを素直に伝えたり受け入れたりすることもできるような関係ができていると思われる。

### (2) 環境の構成や教師の援助

#### ① 遊びがよく見える場所に落ち葉を集める

落ち葉を集める道具として熊手を用意しておき、集めた落ち葉をまとめて運びやすいように段ボールを使うことにした。そして、すみれ組テラスの前にブルーシートを敷いておくことで、幼児らが自分たちで遊びの場をつくることができた。また、テラスで遊ぶことが多くなった4歳児や、園庭で遊ぶことが多い5歳児の目につきやすい場所であったため、日によっては5歳児も遊びに加わり、4歳児にとっては遊びのヒントをもらうこともあった。この日は、始めは異なる遊びをしていたZ児やX児も、自分たちが遊んでいたテラスから、C児、K児の遊ぶ様子がよく見えたと考えられる。

#### ② 場づくりに加わる援助から見守る援助へ

教師は、幼児に誘われて遊びに加わり、積み木を運ぶことを手伝った。しかし、途中でC児の思いを受け、幼児同士のかかわりを大切にするために、見守る援助に切りかえたことで、幼児らは自分たちだけで遊ぶ楽しさを味わうことができたと考えられる。

### (3) 今後に向けて

教師が幼児と一緒に遊びに必要な道具や材料を準備していくことで、その場に集う幼児らが自分たちなりに遊びを工夫してすすめていく場面が増えてきた。今後も、自分たちで遊びの場をつくっていくことができるような環境構成について考えていきたい。



## IV期

身近な環境への興味や関心が高まり、自分で遊びを深めていく時期

### 1. キーワード

自分の思いを伝える 友達の違いに気づく 公平な遊び方

### 2. この事例を選んだ理由 (ナエは2年保育児である)

K児は、これまでお店屋さんごっこや基地ごっこの中で、アイディアを出し遊びをリードする姿が多くみられた。しかし、自分のイメージだけで遊びを進めることもある。最初は一人で遊びを仕切っていたK児が、C児からそれを指摘され、友達の違いに気づき、一緒に遊んでいた友達の考えにも触れて新たな遊び方を見つけていった事例である。

### 3. 事例

事例4 「なんでいつもK児くんが勝手に決めるん？」

2月16日(金)

K児、G児、H児、M児らがプレイルームにマットを敷き、側転や前回りをする遊びをしていたが次第にマットの上でのじゃれ合いとなり、相撲遊びに変わった。

K児とG児がマットの上で向かい合い、H児が行司の役で何度か対戦をし、K児が多く勝っていた。

教師 「H児くんは相撲やらないの？」

K児 「じゃあ、今度はG児とH児がすればいいよ」

H児は嬉しそうにマットの上にあがりG児と2、3度対戦した。その様子を眺めていたM児は「私もやりたい」と言い、K児の「じゃあ、次はM児とG児ね」という一言で対戦することになった。

相手を変えて対戦しているところにC児とL児が様子を見に来た。

C児 「おれもやっていい？」

K児 M児 「いいよ」

C児とL児も加わり、繰り返し相撲をしていたが、「次は〇〇と△△やって」というようにほとんどK児の判断で決まっていた。K児に言われるがままに遊んでいたC児は不満げな表情になっていった。

K児 「次、L児とH児ね」

C児 「なんでいつもK児くんが勝手に決めるん？おれ、ぜんっぜんできん」

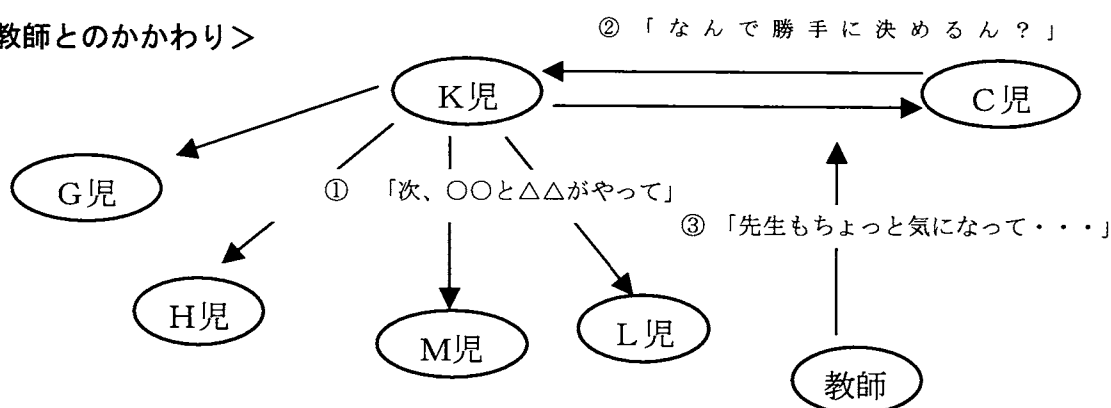
K児 「・・・」

教師 「う～ん、先生もちよっと気になっていたんだ。さっきからK児が誰と誰がやるか全部決めているような気がして。みんなそれでいいのかな～って」

C児 「そうそう、K児くんばかり」  
M児 「みんなで決めればいいんじゃない」  
教師 「C児くんはどうしたらいいと思うの？」  
C児 「みんなで決めればいいんじゃないの？」  
教師 「C児くんとかM児ちゃんはみんなで決めたいって言っているよ」  
K児 「そしたら、みんなで考えよう」  
H児 「こっちとこっちから順番ついて、やればいいねん」  
M児 「うん、それがいい」

H児が提案したやり方にみんなが口々に「そうしよう」と賛成し、C児も納得したようだった。マットの端と端に並び、順番に相撲を繰り返し楽しむ姿が見られた。

<友達や教師とのかかわり>



4. 考 察

(1) この事例からわかる幼児らの学び

① 思いを伝える満足感

遊びの中でK児が相撲の相手を勝手に決めていくことで、C児は、相撲をしたいのにあまりできず、不満をもつようになった。C児はその自分の思いをK児にはっきりと伝えることができた。教師も同じ思いであったことや友達が思いを受け止めてくれたことから、C児は「伝えてよかった」という気持ちをもつことができたと思う。

② 友達の思いに気づくこと

C児以外の幼児らはK児に言われた通りの対戦相手と相撲をし、それなりに楽しんではいたが、C児に「なんでいつも・・・」と言われたことで、友達の不満に初めて気づいたと考える。

### ③ みんなが楽しめる遊び方

C児や教師の言葉をきっかけに、みんなが納得できる遊び方を一人一人が考え始めている。そして友達の見解から、誰もが納得できる公平な遊び方を見つけることができた。

## (2) 環境の構成と教師の援助

### ① 幼児の気づきに共感する

教師は遊びが始まった頃から、K児の言葉だけで遊びが進んでいくことを気にしつつも、どの子も久しぶりの相撲遊びに楽しさを感じている雰囲気であったため、見守っていた。しかし、C児の思いや、今までのK児の遊びの中での友達との接し方を振り返ると、相手の思いに気づく援助が必要であると感じたため、「なんで・・・」というC児の思いと同じ思いであることを伝えた。K児は一人で相撲の対戦相手を決めるという状況に不満をもつ友達の気持ちがわかり、友達の考えも聞いてみんなが納得する遊び方をまわりの友達と一緒に考えることになった。

## (3) 今後に向けて

C児のように、自分の思いを友達に伝えようとする幼児の姿を認め、幼児らが思いを伝え合いながら公平に遊ぶことができるように援助していきたい。

## <1年をふりかえって>

### 1. 協同して遊ぶ姿における学びについて

#### (1) 友達と遊ぶ楽しさ

園生活が2年目となる3年保育4歳児も、進級して新しい環境と出会うことで戸惑い、不安そうな表情で登園することもある。そのような幼児にとっては、教師や3歳児の頃からかかわりのあった友達の存在が心の安定につながっていると思う。そして、安定した関係の中で、友達と互いの思いを受け入れながら遊ぶ楽しさを味わう様子が見られるようになる(事例2)。また、Ⅳ期になると、以前は教師に手助けを求めながら遊んでいた幼児が、自分の遊びに興味をもった友達を遊びの仲間として受け入れると同時に、教師の手伝いを拒む姿が見られるようになった(事例3)。このことから、幼児らが、仲間が増えたことに対する嬉しさを感じるようになったことがわかる。

#### (2) 思いを伝え合う大切さ

幼児らは友達と遊ぶ中で、自分なりの思いをもつ。それは、遊びをもっと楽しくするためのアイデアであったり、一緒に遊ぶ友達のやり方に対する納得できない思いであったり、とさまざまである。その思いを、友達に伝えながら遊ぶことで、幼児らは自分たちのかかわりを深め、遊びを広めていくようになる。

遊びのアイデアを提案する幼児とそれを受け入れる幼児との応答的な関係は、3歳児の頃から一緒に遊ぶことの多かった幼児同士だからこそ生まれたと考えられる(事例2)。また、自分の思いを友達に伝える幼児がいることで、同じ場に集う幼児らがみんなで公平に遊ぶ方法を考えられるようになった(事例4)。

### 2. 環境の構成と教師の援助について

#### (1) 環境の構成

##### ① 園庭の身近な自然物

砂場の砂や水は、混ぜ具合によってさまざまな感触を味わうことができる。また、自由に形を変えることができたり、予想していなかった現象が偶然生まれたり、魅力的な素材であると考えられる(事例1)。また、落ち葉も同様に手触りを楽しんだり、イメージするものに見立てたりしやすい(事例3)。このように自由に扱うことのできる自然物は、幼児らが共通の現象を楽しみ、イメージを共有するために大切だと考えられる。

##### ② イメージを積み上げやすい環境設定

遊びに使うために自分たちでつくったアイテムを残しておき、次の日も同じように設置しておいた。この環境設定は幼児らにとって自分たちのイメージを毎日少しずつ積み上げていくことができ、遊びが発展していくために有効である(事例2)。

### ③ 遊びがよく見える場の設定

事例3において、落ち葉を集めておくことができるようにシートを準備しておいた場所は、テラスで遊ぶことが多くなった4歳児や園庭で遊んでいる5歳児の目につきやすい場であった。そのような位置に場を設定することで、遊びに興味をもった幼児同士の新たなかかわりが生まれやすいと言える。

## (2) 教師の援助

### ① 遊びの一員としての教師と見守る教師

教師も遊びの場に加わり一緒に驚きや楽しさを味わうことで、遊びに加わることをためらうことの多い幼児も、自分なりの遊び方を見つけて遊び続けることができた(事例1)。また、幼児が喜んで新しい友達を受け入れ、教師が遊びに加わらなくても次第に自分たちだけで仲間意識を強めながら遊びをすすめていく姿もみられるようになっていった(事例3)。3年保育児のIV期には、自分たちでかかわりを深め、仲間関係を築くことができるようになる幼児もいる。そのため教師は、幼児の思いに寄り添いながら、幼児らの育ちにに応じて遊びに加わったり、見守る援助に切り替えたりすることが大切だと考える。

### ② アイディアを生むきっかけを与える

事例2は、教師の仕草がヒントとなり、幼児が遊びの新たなアイディアを見つけることができた事例である。このように、教師が幼児の新たな発想を生むきっかけを与え、遊びの方向性を変えることで、幼児らの遊びの幅が広がっていくことがわかる。

### ③ 思いを伝える姿を認める

教師は、幼児が自分の納得していない思いを素直に友達に伝える姿を認めた(事例4)。この援助によって、幼児は「自分の気持ちを伝えてよかった」という思いをもてたと考える。一方、相手の幼児は友達の思いに気づくことができ、自分のやり方を振り返ることとなった。このように、自分の思いを友達に伝える姿を認める援助は、幼児同士が思いを互いに伝え合い、公平に遊ぶことができるようになるために大切である。

## 3. 今後に向けて

3年保育4歳児は、3歳児の頃からの友達とのかかわりを深めつつ、2年保育児とも新たな関係を築いていく。幼児らが自ら遊びの場をつくり、思いを出し合いながら遊びを広めていけるような援助を今後も考えていきたい。